【特別講演要旨】

「立ち位置を確認しながらの病害防除研究　－そして持続的農業にむけ－」

守川　俊幸（富山県農林水産総合技術センター）

県の試験研究機関において、もっぱら病害虫防除に関する業務を行ってきた。大学時代は *Sclerotium cepivorum* という *Allium* 属植物に適応した病原菌を題材に、菌学的所属、小型分生子の機能、今でいう地域における MCG の分布と普遍性、菌ウイルスと表現型などをテーマにしていた。幅広いテーマ（興味が多い）であったが、就職してから大いに役に立った。

最初に赴任した砺波では、チューリップが主な対象作物で、*Botrytis*、*Fusarium*、*Burkholderia* などの菌類病や細菌病を扱ったが、上司がウイルス病を専門とする山本さんから、菌類病を専門とする野村さんに交代した時点で、ウイルス病が主な研究対象になった。当時はインターネットなどなく、とにかく情報に飢えていた。入手できる資料・文献をすべからく読み漁り、実践、失敗と経験を積み重ねた。そして、一つ一つの意味を理解し、無駄の少ない試験設計が立てられるようになった。今は何かと便利になったが、そうしたプロセスを得にくい時代なのかもしれない。

その後も、様々な病害の防除研究に携わったが、それぞれが、どこかで繋がっていると感じる。これまで知り合った技術者との交流はもとより、学生時代の菌ウイルス、温室作業、就職後の多様な病害の防除研究は、TMMMV や TuSV のような菌媒介性のウイルスの防除研究にすべからく活かされていると思う。また、球根類のポストハーベスト病害の経験は、水稲の種子伝染性病害やネギ・タマネギ病害の防除研究、耐性菌対策に大いに役に立っている。たぶん、食酢の種子消毒利用についても、チューリップでの経験が無ければ生まれてはいない。

顕微鏡観察、圃場での出来事、フィールドサーベイ、仮説検証の過程には、新しい発見が満ちていた。それらは、見過ごしてしまうようなものから、やっとの思いで探し当てたものまで様々である。いつも深く深く考えていた。そして同時に、（球根）生産者の毎日を背負っているという責務の重さも感じていた。自分の立ち位置を確認しながら、どのように社会に還元していくか、そのありようについて問い続ける日々だったように思える。余裕などなく、難防除を克服するための「もがき」が、今の自分を作り上げたと思う。

若いころは、担当する業務を懸命にやりさえすれば、役割は果たされ、成果が自ずと活かされると思っていたが、実際にはそうはならない。実際には、自分で既定の枠を設定せず、自分自身で能動的に行動する必要がある。また、組織の理解や協力が得られないと大きな前進は図れない。仕組みが無ければつくるしかない。そして研究の場合、ユーザーからすればアウトプットが全て（頑張っている姿、議論・検討、学術活動など、その過程はあまり重要ではない）であることを知らなければならない。以上は、当たり前なのか、誰も教えてはくれなかった。少なさを連携でカバーすることが大切な時代、こんなことを伝え合うことが必要だと思う。

周辺では、自己を認めるため、限定合理性に気づかないふりをして合議し、語りえないはずなのに価値観を設定し、無用な仕分けや周辺の評価を日常としている。我々、植物保護の技術者であれば、求められているのは「処方箋（対策）が正しいこと」なのに。

今や、すべからく大きく変動しているが、これまで人類という種は、助け合うことによって環境に適応し、生存してきたはず。山歩きをしながら、遠くの山並みを眺めながら、自分の立ち位置を見つめてみることがある。我々の分野は狭い。それでも、研究会活動では、我々が多様な価値観の集合体であることを認めながら、フラットな気分で議論したいと思う。責務である持続的農業の実現にむけ。

プロフィール

守川俊幸（もりかわとしゆき）

1987 年富山県庁に入庁し、農業技術センター（現、農林水産総合技術センター）に配属。以降、砺波市および富山市の拠点で、病害虫防除、企画管理を担当、現在に至る。

主な受賞歴：日本植物病理学会 学術奨励賞（1997 年）、農業技術功労者表彰（2016 年）、日本植物病理学会 学会賞（2022 年）

受賞歴、論文等の功績は
こちらから（researchmap）